Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

妊娠期女性における心理学的研究の現状と課題

田中, 美帆

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,10(1):1-6

(Issue Date)
2016-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009712

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009712

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第10巻 第１号 2016
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.10 No.1 2016

研究論文

妊娠期女性における心理学的研究の現状と課題

The Review of Psychological Studies about Pregnancy Women

田中　美帆 *
Miho TANAKA*

要約：妊娠期を通じて平均12kgもの体重増加を経験する女性にとって，妊娠は身体面での変化のみならず，心理面でも大きな変化を遂げるライフイベントである。本研究では，妊娠期女性に焦点をあて，妊娠期に象徴的な身体変化や状況と関連させながら妊娠各期の心理面の様相についての先行研究を概観し，今後の展望を試みた。まず，古典的研究では，臨床的な貢献に重点が置かれ，感情的適応や母性の側面から検討されてきた。一方，近年の研究では，妊娠初期にある女性の心理面を扱った研究では，妊娠の受け止めおよびつわりに関するもの，妊娠中期では，胎動という象徴的な出来事を中心に生まれてくる子どもについてのイメージや親としての意識に関するもの，妊娠後期には，生まれてくる子どもについてのイメージの変化や胎動，身体変化による影響に関するものが検討の中心であった。とりわけ，妊娠中期と後期では，その様相が異なることが明らかにされていた。以上の議論を踏まえ，妊娠期の心理面の変化は多岐にわたることが指摘されているが，実際には子どもの発達や育児により関連する領域以外に焦点が当てられていないことを課題として指摘し，今後は母親としての自分に加えて，個人としての自分を考慮した検討が必要であると指摘した。

キーワード：妊娠期，妊娠各期，身体変化と心理変化

１．はじめに

妊娠期女性は，10ヶ月という短期間に急激な身体変化を経験する。例えば，外見的変化では，非妊娠時の３～５倍にもなる乳房の膨らみ，重心の移動により妊婦特有の身体つきになり，妊娠期間を通して平均12kg程度体重が増加する。また，体内においてもつわりによる消化器，胎児の発育を助けるための胎盤からのホルモン分泌に代表される生理学的プロセスが急激に変化する。このような身体変化は，妊娠期女性の認知，情動，行動，人格，自己等，多岐にわたり変化を及ぼすことが知られている（e.g., Ammaniti, et al., 1992）。このような心理変化は不可逆性を持ち，妊娠以前に持っていた基本的な感覚の多くが再構成される（Fava-Vizziello, Antonioli, Cocci, & Invernizzi, 1993）。すなわち，妊娠期女性は，身体面および心理面において劇的な変化を経験することから，女性の生涯にわたるライフコースを捉える上で，妊娠期に着目することは重要であると考えられる。

妊娠期女性の心理について検討した研究は，欧米においては1960年代から，国内においては1970年代後半ごろからみられる（e.g., Hooke & Marks, 1962 ; 花沢 , 1977a）。妊娠期女性を対象とした研究は，現在に至るまで続けられているが，国内においては，妊娠期女性の心理面を扱った研究を体系的に展望した研究は必ずしも十分ではない。そこで，本研究ではまず，否定的感情や母性といった妊娠期女性の心理面を扱った古典的な研究を取り上げ，当初の研究がどのようなものであったかを概観する。その上で，近年行われた研究について，現代の産科学の定義に従い，妊娠初期（妊娠16週未満），妊娠中期（妊娠16週～27週），妊娠後期（妊娠28週以降）のそれぞれの時期に象徴的な身体変化や状況と関連させながら，妊娠各期の心理面の様相について先行研究を整理する。なお，妊娠期女性の心理面には，胎児の影響以外に，パートナーやその他の家族の要因や女性が置かれている環境的要因や社会的要因が複雑に絡み合っていると考えられるが，本研究においては，妊娠期女性本人を対象とした研究を中心に焦点化し，議論を行うこととする。

２．妊娠期の心理面を扱った古典的研究

１）否定的感情に着目した研究

妊娠期の心理面を扱った研究は，1960年代頃からみられるが，当初の研究の多くは，感情的適応の側面から検討されてきた（岡本 , 2016）。妊娠期の不安とつわり症状との間には関連があること（花沢 , 1977b），正常分娩群と異常分娩群の間に妊娠期の不安の違いがあること（Gorsuch & Key, 1974）。妊娠に対してアンビバレ

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2016年３月31日　受付
2016年７月１日　受理）

ントな態度を持つ群では，つわり症状がある人が有意に高いこと（Chertok, 1972）等が示されている。また，花沢（1977b）はつわりの重さと胎児への愛着との関連を検討し，つわりが妊娠期女性の母性発達指標のひとつになりうると考察している。このように，妊娠期の心理面を扱った古典的研究は，妊娠に伴う身体変化と妊娠期の否定的感情が関連する（浜・戸梶 , 1990）という立場から検討されてきたが，妊娠期の身体変化や状況は，妊娠期の女性の心理面のみに起因するものではないという点を留意する必要がある。

2）母性に着目した研究

母性とは，母親の子に対する感情，行動，態度の背後にあって，様々な養育行動を喚起し，維持する機能をもつ行動―情動複合体であると定義されている（仁平・村井・村井 , 1986）。初めての妊娠に伴う心理的適応を 4 期に分けて検討した Gloger-Tippelt（1983）は，妊娠初期の混乱期を経て，妊娠 8 週目～19週目に母親になるという事実に適応し始めると指摘している。近年，とりわけ母親になるということへの適応については多様な形があることが指摘されており（Stern, Bruschweiler-Stern, & Freeland, 1998 北村訳 2012），Gloger-Tippelt（1983）のモデルについては更なる議論が求められている。加えて，妊娠期の母性的反応を扱った古典的研究として，足立・村井・岡田・仁平（1985）の研究がある。足立他（1985）は，妊娠期にある女性と育児期の女性の乳児の泣き声の弁別能力について研究を行い，妊娠期にある女性の泣き声の弁別は，育児期の女性とほぼ同様のものであることを示した。この結果について，繁多・大日向（1988）は，対象の妊娠期女性が妊娠後期であったことを踏まえたとしても，乳児の泣き声への関心は妊娠中にすでに高められていると指摘している。なお，近年では，相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能である養護性（小嶋 , 1989）という概念が広く用いられており，これまでの母性の概念を生涯発達の観点からより広い概念で捉えようとする試みが行われている。

3）古典的研究のまとめ

妊娠期の心理面を扱った古典的研究は，感情的適応や母性の側面から検討されてきた。これらの側面が研究の中心であった理由について，岡本（2016）は，母親になるプロセスである妊娠期の不適応は，妊娠期を健康に過ごすことの妨げになることから緊急性が高く，その不適応を解消するという臨床的な貢献に重点が置かれたからであると指摘している。例えば，妊娠期の感情的適応や母性の側面が，出産後の育児や母親の状況に影響を与えることが明らかにされている（Cohen & Slade, 2000）。すなわち，これらの古典的研究は妊娠期の心理変化そのものを研究するというよりも，妊娠期に起こる急激な身体変化から妊娠期の心理側面を理解しようと試みたものが中心であったといえる。加えて，これまで生物学的，医学的事象とみなされてきた妊娠について，動物ではなく人間を対象に研究されたことは，これ以降の妊娠期の心理面を扱った研究に重要な示唆を与えていると考えられる。

3．妊娠各期の心理

妊娠期の心理面を扱った古典的研究は，妊娠後期を対象としたものが中心であったが，近年，妊娠初期や中期における心理面についても明らかにされ始めている。また，妊娠期にわたる心理変化を横断的や縦断的に捉えた研究も行われており，妊娠各期の心理をより詳細に捉えることが可能になっている。これらの先行研究では，妊娠期にある女性の心理面は妊娠期を通じて一定ではなく，妊娠各期においてその様相が異なることが指摘されている（堤・定月・石井・大平・大月，2008）。以下では，妊娠期を 3 つの時期に分け，それぞれの時期に象徴的な身体変化や状況と関連させながら妊娠各期の心理面の様相について議論する。

1）妊娠初期

1－1　妊娠の受け止め

妊娠は，女性たちにとって必ずしも幸福感のみを喚起する経験ではない。たとえ望んだ妊娠であっても，妊娠の発覚は女性の生活を大きく変える契機となり，「嬉しいけれど，もう少し夫婦二人の生活を楽しみたかった」等のアンビバレントな感情が生起しやすい（Trad, 1999）。例えば，柘植・菅野・石黒（2009）は妊娠の受け止めについて，「嬉しかった」が最も多かったものの，「驚いた」，「困惑した」，「心配した」と回答した女性も多いことを明らかにしている。また，「嬉しかった」と回答した人の約 3 割が「驚いた」，「心配した」，「困惑した」等もともに選択していた。柘植他（2009）の研究は，育児期の女性を対象にしたものであるが，これらの結果を併せると妊娠の受け止めは，多くの女性にとってアンビバレントなものであるといえる。この妊娠の受け止めについて Cohen & Slade（2000）は，相反する感情の間で揺れ動くという不安定さが母親になるということに不可欠な経験のひとつであると指摘している。したがって，妊娠の受け止めがポジティブな感情のみでないことは，妊娠初期以降の心理適応において重要な意味を持つといえる。

一方で，妊娠が計画外であることは，妊娠の受け止めやその後の妊娠の適応に課題が生じることが示されている（Rubin, 1984 新藤・後藤訳 1997）。先述の柘植他（2009）においても，妊娠の受け止めについて「困惑した」と回答した人のうち，計画外の妊娠であった人は83.3%にのぼる。計画外の妊娠についての先行研究は，主にキャリアに価値を置いている女性を対象にしたものおよび若年妊娠の女性を対象にしたものがある。まず，キャリア途上で妊娠が発覚した女性を対象に質的研究を行った天野・恵美須・志村・岡田（2013）では，計画外の妊娠は，仕事や家族との間の調整といった社会的な問題，自己の価値観の揺らぎという心理的な問題，妊娠初期特有の体調不良という身体的な問題が重なり合う状況が生じることが明らかにされている。加えて，妊娠の受け止めは，その後の妊娠の継続に大きな影響を与える。特に19歳未満の若年妊娠では，本人のみならず周囲がどのように妊娠を受け止めるかが妊娠の継続への影響が大きい（砂川・田中 , 2012）。すなわち，キャリアに価値を置いている女性と若年妊娠の女性は抱える問題が異なる一方で，妊娠を予定していた女性とは異なる問題や葛藤を抱えると考えられる。これらのことから，妊娠の受け止めを検討する際，妊娠が計画外であったか否かを考慮することが必要であるといえる。

1－2　つわりが与える影響

妊娠初期の身体変化としては，つわりがある。つわりは，妊婦の50%～80%が経験し，6 週間ほど続く（堤他 , 2008）。妊娠初期

の女性にとって，つわりに伴う不快感や体調不良は妊娠期の困りごとの上位に挙げられる（行田他 , 2001）。また，妊娠期にある女性が経験するストレッサーについて検討した湯舟（2012）は，つわりによる吐き気や不快感は多くの女性にとってストレッサーになり，慢性的な疲れや生活リズムの変化とともに，抑うつを高めると指摘している。つわりの原因は胎盤から分泌されるホルモンの上昇によるものだと考えられているが，その機序については未だ明らかになっていない。したがって，妊娠期にある女性の全てが経験するわけではない点からもつわりへの心理的・社会的要因の影響も無視できないと考えられる。

1－3　妊娠初期のまとめ

以上のことから，妊娠初期にある女性の心理面を扱った研究は，妊娠の受け止めおよびつわりに関するものが中心であった。妊娠初期，とりわけ妊娠12週までの流産が流産全体の80%を占める（日本産科婦人科学会 , 2008）。すなわち，妊娠初期の女性を対象とした研究には，特別な配慮が必要であると考えられる。また，妊娠初期は，胎内の子どもの存在を十分に実感している女性は少ない（Brazelton & Cramer, 1990）。これらのことが，妊娠初期の心理面についての検討が十分ではない理由のひとつとして挙げられるといえよう。

2）妊娠中期

2－1　胎動が与える影響（1）

子どもについての具体的なイメージは，妊娠16週前後から始まる胎動を契機として急速に発達することが知られている（Lumly, 1982）。Lumly（1982）では，妊娠初期は，胎内の子どもを人間として認識していたのは30%のみであったが，妊娠中期には63%に増加したと報告されている。また，初めての胎動の経験は，妊娠期にある女性の胎児への愛着を増大させる（Condon, 1985）。さらに，Stern et al.（1998 北村訳 2012）によれば，妊娠中期において女性は胎動により「音楽に合わせてお腹を蹴るので音楽的センスが豊か」等，生まれてくる子どもについてのイメージをより豊かに抱き，妊娠中期の終わりごろには最も詳しく描写される。このような生まれてくる子どものイメージは，胎動への反応，すなわち胎内の子どもへの言葉かけやお腹に触れる等の相互作用を通じてさらに発達していく（Rubin 1984 新藤・後藤訳 1997）。これらのことから，胎動は，妊娠期の心理変化の重要な契機になると考えられる。

2－2　親意識の芽生え

胎動は，生まれてくる子どもについてのイメージの形成を助け，母親としての自覚を促すことが示されている（岩田・山内・杉下 , 1997）。榮（2004）は，妊娠期にある女性の母親としての意識の構造を縦断的に検討している。その結果，妊娠中期の母親としての意識は「不安感」,「自己成長感・子ども至上主義感」,「母親・育児肯定感」,「制約感」の 4 次元から構成されていた。この 4 次元は，妊娠期のその他の時期においても認められたが，妊娠中期においては，妊娠初期と比較して「母親・育児肯定感」の説明力が高まることが示されている。また，小泉・中山・福丸・無藤（2004）は，妊娠中期を中心とする女性に対して，母親としての意識を調査し，「自分の経験が豊かになるだろう」,「人を思いやる気持ちが強くなるだろう」といった肯定的側面を意識する一方で，「子どもに対してイライラすることが多くなるだろう」,「子どものために自分の行動が制限されるだろう」という否定的な意識も有していることを指摘している。さらに，澤田（2005）は，妊娠を契機とした主観的変化について妊娠中期にある女性を対象に検討し，妊娠期にある女性は「自己成長感」,「制約感」を感じていることを示している。また，このような主観的変化は，生まれてくる子どものイメージと関連しており，子どもに弱々しいイメージを持っていると妊娠に対する制約感が高いことが明らかにされている。その一方で，育児期を対象とした先行研究（柏木・若松 , 1994）と比較すると妊娠期においては，育児期に見られるような明確な人格的成長を感じるまでには至っておらず，萌芽的認識に留まっていると指摘している。これらのことから，妊娠中期には親としての意識が芽生える時期であるが，育児期が持つ親としての意識とは必ずしも一致するわけではないといえる。

2－3　妊娠中期のまとめ

以上のことから，妊娠中期では胎動という象徴的な出来事が，生まれてくる子どもについてのイメージや親としての意識を芽生えさせることが明らかにされている。母親としての新しい意識は妊娠中のある時期に生じ，出産後より明確になる（Stern et al., 1998 北村訳 2012）。とりわけ，子どもについてのイメージを膨らませることは母親になることへの準備として重要な意味を持つことが指摘されている（本島 , 2007）。しかし，胎動の経験が，全ての女性にとって生まれてくる子どもについてのイメージや親意識を芽生えさせる経験ではないことも指摘されており（堤他 , 2008），この点については更なる慎重な議論が必要である。

3）妊娠後期

3－1　胎動が与える影響（2）

胎動の時期やその認知には個人差があり，胎動についての研究は妊娠後期にも認められる（鈴木・久慈 , 1995）。岡本・菅野・根ヶ山（2003）は，妊娠中期から後期の女性の胎動日記を分析している。その結果，胎動に基づく胎児への意味づけには，2 つのターニング・ポイントが存在することが示されている。まず，第一のターニング・ポイントは，妊娠29〜30週であり，胎児の足についての語りが増加するとともに，胎児を人間以外の存在としていた記述が減少する。第二のターニング・ポイントは，妊娠33週〜34週であり，胎動を自分と胎児とパートナー等の第三者との三者関係，もしくは外界の音等との三項関係の中で意味づけ始めることを明らかにしている。同様に，岡本他（2008）は，胎児日記を用い，胎動を表すオノマトペ使用の変化を検討している。オノマトペとは，擬声語，擬音語，擬態語の総称であり（田守 , 2002），妊娠後期においては，妊娠中期と比較してオノマトペの多様性よりも胎児を多様に意味づけるようになることが示されている。すなわち，妊娠後期においては，動きそのものを示すオノマトペよりも胎児そのものについての記述が増加していた。これら 2 つの研究を通して，岡本（2016）は，胎児がただ動くということよりも胎動に妊娠期の女性が応じること，女性やパートナーの声かけや外界の音に胎児が反応するといった原初的なやりとりが重要であると指摘している。以上のことから，妊娠中期から妊娠後期に

わたり胎動が見られるが，これら 2 つの時期においては，胎動の意味づけが異なるといえる。

3－2　生まれてくる子どもについてのイメージ

妊娠中期とともに妊娠後期においても，女性は子どもの性格や気質についてより具体的なイメージを持つことが指摘されている。Zeanah, Zeanah, & Stewart（1990）は，妊娠後期にある女性の92%が胎児の性格について，「活発な」，「おおらかな」，「社交的な」といった具体的なイメージを有していると指摘している。しかしながら，このような生まれてくる子どもについてのイメージの形成は，妊娠中期ですでにピークを迎えており，後期においては徐々に停滞していく（本島 , 2007）。先述の岡本他（2003）の胎児日記においても，出産が近づくにつれて日記の数は減少している。イメージ形成の停滞が生じる理由について，Stern（1995 馬場・青木訳 2000）は，生まれてくる子どもとの生活に向けてこれまで想像してきた子どもについてのイメージの形成を一度白紙にして，整理することで，胎児に対する期待との落差から自らを守ろうとするからであると指摘している。また，理想化された子どもについての想像が出産まで繰り返されたり，強すぎたりすることは，現実の子どもが妊娠中に想像していたイメージと異なることに喪失感や失望感を覚え，不適応を起こす可能性もある（堤他 , 2008）。特に，生まれてくる子どもが早産である場合，母親になる女性は，子どもについてのイメージを白紙に戻す時間が十分ではなく，出産後の心理適応に困難を抱えることも指摘されている（Stern et al., 1998 北村訳 2012）。これらのことから，妊娠後期に生まれてくる子どもについてのイメージを停滞させ，整理することは，出産後の心理適応についても重要であると考えられる。

3－3　身体変化が与える影響

妊娠後期には，女性の身体変化がより顕著になる。妊娠初期および中期と比較しても，明らかにお腹が大きくなり重心も移動する。妊娠中の身体変化の受け止めについて検討した柘植他（2009）は，「楽しかった」，「嬉しかった」，「面白かった」といった肯定的な回答よりも，「しんどかった」，「辛かった」，「大変だった」というような苦労について焦点を当てた回答のほうが多かったことを報告している。また，妊娠期のストレッサーについて検討した湯舟（2012）においても，「お腹が大きいことによる行動範囲の減少」や「慢性的な疲れ」が妊娠期のストレッサーの上位に挙げられている。Cohen & Slade（2000）は，妊娠に伴う身体変化は，女性の身体イメージを不安定にし，妊娠期女性の自己やアイデンティティについての変化をもたらすと指摘している。大きくなるお腹やそれに伴う体調の変化は，とりわけ妊娠後期の女性に妊娠しているという事実や母親になるという事実を突きつけ続ける。このような身体変化は親となることに必ずしも不可欠ではないが，母親になることへの心理面に重要な役割を果たすといえよう。

3－4　妊娠後期のまとめ

以上のことから，妊娠後期には，生まれてくる子どもについてのイメージの変化や胎動，身体変化が心理面に影響を与えていると考えられる。とりわけ，胎動や生まれてくる子どもについてのイメージは，妊娠中期においても取り上げられていたが，詳細なイメージを有する中期と徐々にそのイメージを整理する後期ではその様相が異なることが明らかになった。妊娠後期は，物理的にも心理的にも出産に向けた準備を行う。小嶋（2014）は，妊娠後期の女性は，分娩経過や出産を乗り越えられるのかという点に不安を感じていることを明らかにしている。このような出産の準備やそれに伴う不安に対処するため，妊娠後期には中期とは異なる心理面を持つと考えられる。

4．妊娠期の心理についての先行研究の課題と展望

1）先行研究の課題

本論文では，妊娠期女性の心理面を扱った研究を概観してきた。妊娠期女性の心理変化については，臨床的要請から主に感情面や母性といった面から検討されてきた。また，急激なつわりや胎動といった象徴的な身体現象に伴う，もしくは身体現象が契機となり心理変化が生じていることが明らかにされていた。しかしながら，これら先行研究の多くは，妊娠期を母親になることの萌芽期であるとし，妊娠期女性を胎児や生まれてくる子どもの発育に重要な影響を与える要因の一つとして検討している。また，妊娠期の心理面の変化は，感情，行動，思考，役割，価値観，人間関係等多岐にわたることが指摘されているが（Stern et al., 1998 北村訳 2012），実際には妊娠の受け止めといった感情や子どもについてのイメージ，親となることによる役割等の子どもの発達や育児に関連する領域以外については必ずしも十分に検討されているとはいえない。これは，先行研究が主に助産学，看護学の立場から行われてきたことに起因しているといえる。

2）今後の展望

妊娠期女性は，多重役割の中で生きている。個としての自分に加え，妻としての自分，そして母親としての自分が加わりつつある。先述の課題を踏まえると，これまでの妊娠期女性を対象とした研究は，主に母親としての自分に焦点が当てられており，個人としての自分についておよび個人としての自分が持つ価値観等が妊娠を経験することでどのような影響を受けるのかについては見落とされている（神谷 , 2007）。また，先述の 3 つの多重役割はそれぞれが独立しあっているとは考えにくく，これらが相互に関連しあっているという視点も重要であると考えられる。今後はこれらの点を踏まえた研究が必要であろう。

引用文献

足立 智昭・村井 憲男・岡田 斉・仁平 義明（1985）. 母親の乳児の泣き声の近くに関する研究 教育心理学研究 , *33*, 146-151.

天野 道代・恵美須 文枝・志村 千鶴子・岡田 由香（2013）. キャリア途上にある女性の予期せぬ妊娠から出産にのぞむまでの体験 母性衛生 , *54*, 354-365.

Ammaniti, M., Baumgartner, E., Candelori, C., Perucchini, P., Pola, M., Tambelli, R., & Zampino, F. (1992). Representations and narratives during pregnancy. *Infant Mental Health Journal, 13*, 167-182.

Brazelton, T. B., & Cramer, B. G. (1990). *The earliest relationship: Parents, infants, and the drama of early attachment*. Boston: Da Capo Press.

Chertok, L. (1972). The psychopathology of vomiting of

pregnancy. In J. Howells (Ed.), *Modern perspectives in psycho-obstetrics* (pp. 269-282). New York: Brunner/Mazel.

Cohen, L. J., & Slade, A. (2000). The psychology and psychopathology of pregnancy. In C. H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health* (3rd ed.). New York: Guliford Press.

Conden, J. T. (1985). The parental-foetal relationship: A comparison of male and female expectant parents. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology, 24*, 313-320.

Fava-Vizziello, G., Antonioli, M. E., Cocci, V., & Invernizzi, R. (1993). From pregnancy to motherhood: The structure of representative and narrative change. *Infant Mental Health Journal, 14*, 4-16.

Gloger-Tippelt, G. A. (1983). A process model of pregnancy course. *Human Development, 26*, 134-148.

Gorsuch, R. L., & Key, M. K. (1974). Abnormalities of pregnancy as a function of anxiety and life stress. *Psychosomatic Medicine, 36*, 352-362.

浜 治世・戸梶 亜紀彦 (1990). 妊産婦の心理――情動変容の研究を中心に―― 心理学評論 , *33*, 104-121.

花沢 成一 (1977a). 妊婦の妊娠時期による不安の変動――母性心理学研究Ⅳ―― 心身医学 , *17*, 403.

花沢 成一 (1977b). 妊産婦の不安に関する心理学的研究 研究紀要 (日本大学), *19,* 107-125.

繁多 進・大日向 雅美 (1988). 母性――こころ・からだ・社会――真珠社

Hooke, J. F., & Marks, P. A. (1962). MMPI characteristics of pregnancy. *Journal of Clinical Psychology, 18*, 316-317.

岩田 銀子・山内 葉月・杉下 知子 (1997). 妊婦の自己概念の再形成に関する一考察 母性衛生 , *38,* 167-172.

神谷 禎恵 (2007). 子育て期女性の自己認知と子育て支援に関する課題と現状 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 , *39*, 29-36.

柏木 恵子・若松 素子 (1994).「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み 発達心理学研究 , *5*, 72-83.

小泉 智恵・中山 美由紀・福丸 由佳・無藤 隆 (2004). 妊娠期における夫婦の状況――親となる意識の男女比較―― お茶の水女子大学こども発達教育研究センター紀要 , *1*, 13-18.

小嶋 秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣選書

小嶋 奈都子 (2014). 妊婦とパートナーの妊娠への適応と関連する個人的背景の比較 日本母子看護学会誌 , *7,* 11-21.

Lumley, J. M. (1982). Attitudes to the fetus among primigravidae. *Australian Pediatric Journal, 18*, 106-109.

本島 優子 (2007). 妊娠期における母親の子ども表象とその発達的規定因及び帰結に関する文献展望 京都大学大学院教育学研究科紀要 , *53*, 299-311.

行田 智子・生方 尚絵・杉原 一昭・大原 明子・真下 由利子・星野 ひさ子・阿部 トメ子 (2001). 妊娠各期における妊婦の体験や感じていること 母性衛生 , *42*, 599-606.

日本産科婦人科学会 (2008). 流産・切迫流産 公益財団法人日本産科婦人科学会 Retrieved from http://www.jsog.or.jp/public/knowledge/ryuzan.html (2016年 5 月31日)

仁平 義明・村井 憲男・村井 則子 (1986). 母性確立への乳児の個性の影響 母性衛生 , *27*, 700-705.

岡本 依子 (2016). 妊娠期から乳幼児期における親への移行――親子のやりとりを通して発達する親―― 新曜社

岡本 依子・菅野 幸恵・根ヶ山 光一 (2003). 胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係――胎動日記における胎児の意味づけ―― 発達心理学研究 , *14*, 64-76.

岡本 依子・菅野 幸恵・東海林 麗香・亀井 美弥子・八木下 暁子・高橋 千枝・青木 弥生・川田 学・石川 あゆち・根ヶ山 光一 (2008). 妊娠期における母子の接触としての胎動――胎動日記における胎動を表すオノマトペの分析から―― 湘北紀要 (湘北短期大学), *29*, 29-41.

Rubin, R. (1984). *Maternal identity and the maternal experience*. New York: Springer.
(ルービン , R. 新藤 幸恵・後藤 桂子 (訳) (1997). 母性論――母性の主観的体験―― 医学書院)

榮 玲子 (2004). 妊娠期における母親意識の構造 香川県立保健医療大学紀要 , *1*, 49-56.

澤田 忠幸 (2005). 妊娠を契機とした男女の人格発達――夫婦関係，性役割，子どもイメージとの関連―― 家族心理学研究 , *19*, 105-115.

Stern, D. N. (1995). *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy*. New York: Basic Books.
(スターン , D. N. 馬場 禮子・青木 紀久代 (訳) (2000). 親―乳幼児心理療法――母性のコンステレーション―― 岩崎学術出版社)

Stern, D. N., Bruschweiler-Stern, N., & Freeland, A. (1998). *The birth of a mother: How the motherhood experience change you forever*. New York: Basic Books.
(スターン , D. N., B- スターン , N., & フリーランド , A. 北村婦美 (訳) (2012). 母親になるということ――新しい「私」の誕生―― 創元社)

砂川 公美子・田中 満由美 (2012). 10代で妊娠をした女性が自身の妊娠に適応していくプロセス 母性衛生 , *53*, 250-258.

鈴木 武徳・久慈 直志 (1995). 妊娠から出産まで 有紀書房

田守 育啓 (2002). オノマトペ――擬音・擬態語を楽しむ―― 岩波書店

Trad, P. V. (1990). Emergence and resolution of ambivalence in expectant mothers. *American Journal of Psychotherapy, 44*, 577-589.

柘植 あづみ・菅野 摂子・石黒 眞里 (2009). 妊娠――あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください―― 洛北出版

堤 治・定月 みゆき・石井 邦子・大平 光子・大月 恵理子 (2008).

第 2 章 妊娠期における看護 森 恵美・高橋 真理・工藤 美子・堤 治・定月 みゆき・坂上 明子・石井 邦子・大平 光子・大月 恵理子・渡辺 博・亀井 良政・豊田 長康・香取 洋子・新井 陽子（著）系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学各論 医学書院

湯舟 邦子（2012）. 妊婦が経験するストレッサーとストレス反応およびコーピングの関連性 昭和大学保健医療学雑誌 , *10*, 13-19.

Zeanah, C. H., Zeanah, P. D., & Stewart, L. K. (1990). Parents' constructions of their infants' personalities before and after birth: A descriptive s*tudy. Child Psychiatry and Human Development, 20*, 191-206.